

発行：〒656-0011 兵庫県洲本市炬口1-3-19 東亜天文学会速報部

郵便振替口座：00980-8-189107 加入者名：東亜天文学会速報部 購読料1部130円

Published by the Department of Yamamoto Circular, Oriental Astronomical Association

Collaborating with the Computing and Minor Planet Sections

P. O. Box No.32, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-8691 JAPAN

e-Mail address: (Subscription) URL: <http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/yc.htm>

編集：中野 圭一 ☎ 0799-22-3747 Fax: 23-1104 e-Mail address:

Editor: *Syuichi Nakano*, 3-19, Takenokuchi 1 Chome, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-0011 JAPAN

ボアッティーニ新周期彗星 P/2009 B1 (Boattini)

ボアッティーニ (*A. Boattini*) は、2009年1月21日にカテリナ・スカイサーベイの68-cm f/1.8 シュミットでさんかく座のM33近くを撮影した搜索画像上の次の位置に18等級の新彗星を発見した。発見当時、彗星には強く集光した10"のコマと東北東に幅広い約30"の尾が見られた。米国のライアン (*W. H. Ryan*) の2.4-m反射による発見直後の観測では、淡い尾が東北東に伸びているのが観測された。また、1月22日にホームズ (*R. Holmes*) が30-cm反射で観測したところ、彗星には、恒星状に集光した9"の楕円形のコマと東北東に22"の尾が見られるなど、彗星は、発見直後から多くの観測者によって捕らえられた (IAUC 9013)。なお、カテリナ・スカイサーベイが2008年11月18日に行なっていた搜索画像上にこの彗星の発見前の観測が見つかっている。核光度は19.0等であった。

2009 UT	α	(2000)	δ	Mag.
Jan. 21.07424	01 ^h 48 ^m 22 ^s .96	+34° 00'	22".5	18.2

OAA速報部では、2008年11月18日から2009年3月29日までに行なわれた110個の観測から次の軌道を決定した。上尾の門田健一氏 (*K. Kadota, Ageo*) の1月25日のCCD全光度は18.4等であった。我が国では、守山 (井狩康一) と北見 (円館金), 上尾 (門田), 芸西 (関勉) から位置観測が報告された。なお、彗星は、周期が17年ほどの新周期彗星であった。

T = 2009 Feb. 6.2002 TT	Epoch = 2009 Feb. 18.0 TT
$\omega = 128^\circ.5939$	e = 0.637235
$\Omega = 297.4379$	a = 6.689197 AU
i = 22.2286	n = 0.05696959
q = 2.426607 AU	P = 17.30年

超新星 SN 2009N in NGC 4487

山形市の板垣公一氏 (*Koichi Itagaki, Yamagata*) は、2009年1月25日早朝、05時30分JST頃に栃木県高根沢町にある氏の観測所で30-cm f/7.8反射望遠鏡+CCD使用して、おとめ座にある系外銀河NGC 4487を撮影した8枚の搜索フレーム上に、16.6等の超新星2009Nを発見した。この超新星は、同氏が2009年1月4日JSTに同銀河を搜索した画像上には、まだ出現していなかった。また、氏が保有する多数の過去の搜索画像上にも、その姿は見られなかった。板垣氏は、発見同日1月25日夜、23時23分にその出現を確認した。同じ夜、26日00時09分JST頃、上尾の門田健一氏 (*K. Kadota, Ageo*) も、この超新星の出現を確認した。氏の光度は15.8等。超新星の出現位置は、赤経 $\alpha = 12^{\text{h}}31^{\text{m}}09^{\text{s}}.42$, 赤緯 $\delta = -08^\circ02'56".3$, 超新星は、銀河核から東に75", 北に18"の位置に出現している。この超新星は、イタリアの観測者によっても、25日12時JSTすぎに確認され、光度が16.0等と観測された。氏の超新星発見は、これで、45個目となり、氏が持つ我が国での超新星、最多発見数をさらに更新した (東亜天文学会速報部新天体発見情報No.138, CBET 1670, 1671, 1673)。

LINEAR 新彗星 C/2009 B2 (LINEAR)

LINEARサーベイからてんびん座を2009年1月29日に撮影した搜索フレーム上の次の位置に発見された19等級の小惑星状天体が報告された。1月30日に1.23-m反射で、この天体を観測したホームズ (*F. Hormuth*) から、この天体には、約5"のコマと北北西に約10"の淡い尾が見られることが報告された。1月31日に61-cmカセグレインでこの天体を観測したカリフォルニアのヤング (*J. Young*) から、天体には南東に広がった8"のコマがあって、それが北西に伸びていること。同日、91-cmスペースウォッチ望遠鏡でこの彗星を独立発見したマクミラン (*R. S. McMillan*) から、北に8"の尾が見られることが報告され、この小惑星状天体は彗星であることが判明した (IAUC 9016)。

2009 UT	α	(2000)	δ	Mag.
Jan. 29.47388	14 ^h 50 ^m 27 ^s .51	-15° 38'	30".9	19.4

OAA 速報部では、2009年1月29日から4月22日までに行なわれた172個の観測から次の軌道を決した。上尾の門田健一氏 (*K. Kadata, Ageo*) による彗星の CCD 全光度は、2月1日に18.3等、11日に18.0等、21日に17.6等、3月1日に17.4等、14日に17.0等、4月2日に17.1等と観測されている。なお、彗星は、周期が270年ほどの長周期彗星であった。

Epoch = 2009 Feb. 18.0 TT			
T = 2009 Mar. 7.3921 TT	$\omega = 192.4953$	} (2000.0)	a = 41.7422 AU
e = 0.944239	$\Omega = 18.8145$		P = 270 年
q = 2.327608 AU	i = 156.8727		

ファンネス周期彗星 213P/Van Ness (2005 R2 = 2009 B3)

米国カンサスのハグ (*G. Hug*) は、56-cm 反射を使用して、2011年6月に回帰予定のこの彗星を2009年1月31日に検出し、2月1日にこれを確認した。検出時、彗星には非常に淡くて細く直線状に伸びた5'以上の尾が西北西に見られた。検出光度は20等級 (IAUC 9017)。検出位置は、予報軌道 (NK 1602 (= HICQ 2008/2009)) から赤経方向に+14", 赤緯方向に-9"のずれがあり、これは、近日点通過時刻の補正值にして $\Delta T = -0.045$ 日であった。

OAA 速報部では2005年から2009年までに行なわれた847個の観測から次の連結軌道を計算した。平均残差は $\pm 0''.57$ (<http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/nk/nk1745.htm>)。

T = 2011 June 16.23090 TT	Epoch = 2011 June 8.0 TT		
$\omega = 3^\circ.33207$	q = 2.1225332 AU	} (2000.0)	$n^\circ = 0.155751679$
$\Omega = 312.67187$	e = 0.3795974		P = 6.328 年
i = 10.23962	a = 3.4212191 AU		

LINAER 周期彗星 214P/LINEAR (2002 CW₁₃₄ = 2009 B4)

同じくハグ (*G. Hug*) は、2009年1月に近日点を通過したこの彗星を213P 検出と同日の2009年1月31日に検出し、2月1日にこれを確認した。検出時、彗星は、恒星状で、検出光度は19等級であった (IAUC 9017)。検出位置は、予報軌道 (NK 886 (= HICQ 2008/2009)) から赤経方向に+440", 赤緯方向に-266"のずれがあり、これは近日点通過時刻の補正值にして $\Delta T = -0.32$ 日であった。

OAA 速報部では、2002年から2009年までに行なわれた123個の観測から次の連結軌道を計算した。平均残差は $\pm 0''.65$ (<http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/nk/nk1746.htm>)。

T = 2009 Jan. 5.61436 TT	Epoch = 2009 Jan. 9.0 TT		
$\omega = 190^\circ.26825$	q = 1.8437334 AU	} (2000.0)	$n^\circ = 0.143928610$
$\Omega = 348.25904$	e = 0.4887184		P = 6.848 年
i = 15.21330	a = 3.6061016 AU		

NEAT 周期彗星 215P/NEAT (2002 O8 = 2009 B5)

ハグ (*G. Hug*) は、さらに、2010年6月に回帰予定のこの彗星を2009年1月22日に検出し、2月2日にこれを確認した。検出光度は19等級であった。検出時の形状は報告されていない (IAUC 9018)。検出位置は、予報軌道 (NK 1459 (= HICQ 2008/2009)) から赤経方向に+130", 赤緯方向に-65"のずれがあり、近日点通過時刻の補正值にして $\Delta T = -0.31$ 日であった。

OAA 速報部では、2001年から2009年までに行なわれた99個の観測から次の連結軌道を計算した。平均残差は $\pm 0''.59$ (<http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/nk/nk1747.htm>)。

T = 2010 June 8.03884 TT	Epoch = 2010 June 13.0 TT		
$\omega = 222^\circ.45278$	q = 3.2133782 AU	} (2000.0)	$n^\circ = 0.122176816$
$\Omega = 75.44083$	e = 0.2011137		P = 8.067 年
i = 12.78996	a = 4.0223221 AU		

LINEAR 周期彗星 216P/LINEAR (2001 CV₈ = 2009 D1)

月惑星研究所のスカッチ (*J. V. Scotti*) は、2008年10月に回帰したこの彗星を2009年2月19日に検出し、翌2月20日にこれを確認した。検出時、彗星の光度は20等級、彗星は、若干拡散し、西北西に0'.3の尾が見られた (IAUC 9021)。検出位置は、予報軌道 (NK 819) から赤経方向に+157", 赤緯方向に-81"のずれがあり、近日点通過時刻への補正值にして $\Delta T = -0.15$ 日であった。

OAA 速報部では、2001年から2009年までに行なわれた141個の観測から次の連結軌道を計算した。平均残差は $\pm 0''.75$ (<http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/nk/nk1750.htm>)。

T = 2008 Oct. 10.97589 TT	Epoch = 2008 Oct. 21.0 TT		
$\omega = 151^\circ.59667$	q = 2.1598773 AU	} (2000.0)	$n^\circ = 0.128680210$
$\Omega = 359.89322$	e = 0.4441373		P = 7.659 年
i = 9.03505	a = 3.8856309 AU		